



マイラ社製小児自走型車いすのご紹介

マイラ社について



1936年、ウィルヘルム・マイヤー・シニアによりドイツにて創業、創業者の言葉である「障がいを持つ人々には、最高の自立を促し、個人のニーズに合わせた優れた援助が必要」を企業グループの理念に掲げ、車いす・電動車いすから介護リハビリ機器の製造、販売を行うドイツ有数のメーカーです。年間の生産製品数は20万を数え、企業グループ全体では数億ユーロの売上高を誇ります。ヨーロッパ各地だけでなく、日本をはじめアジアにも製品の輸出を行うワールドワイドな企業です。



Mobility and Development

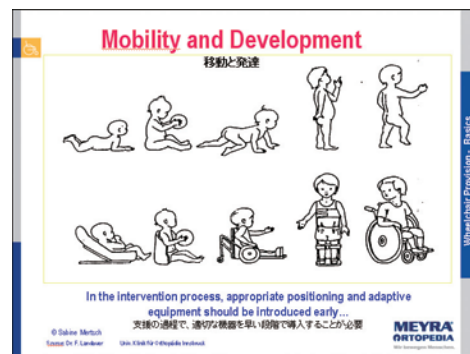
～移動と発達について～

日本の障がい児へのリハビリテーション現場では、歩行が少しでも可能ならば、歩行に力を入れて訓練を行い、訓練時間が終了すると親御さんに抱えられたり、バギーに乗せられて家に帰るといった光景がよく見られます。最近のヨーロッパでは、歩行訓練はもちろん行なわれていますが、その他に「移動」という概念に関して、障がい児と健常児の発達を同じタイムスケールで考える手法が主流となっています。つまり、健常児がハイハイや伝い歩きで自立移動を始める時期から、障がい児にも移動機器を使用させて、自立した移動を行なわせるという考え方です。歩行がある程度可能な子供にも、積極的に車いすを提供し、歩行訓練と車いす操作訓練を、同等のことと考えて訓練を行なっています。

子供にとって、自由に楽に移動できるということは大きな意味があります。例えば、大好きなおもちゃを自分で取りに行ったり、知らない人に会ったとき、ちょっと恥ずかしいのでお母さんの後ろに隠れたり。さらに、自分が知らない何かを見つけたとき、近寄ってそれが何かを確かめたり。

自分がしたいように、自分で動くことができるということは、大きな価値があります。さらに、様々な物事を、見たり、聞いたり、触ったり、匂いをかいだり、口の中に入れて感触を確かめたり。そうした五感の全てを利用して、自分が興味を示したものに対して、それがどういったものかを理解しようとしています。そうした経験を通して、体の発達だけではなく、心も発達させていきます。

なんらかの障がいでも立つことや歩くことが困難な場合、こうした経験をつむ機会が、健常児に比べて、大きく減少してしまう場合があります。特に自走型ではない車いすや小児用バ



In the intervention process, appropriate positioning and adaptive equipment should be introduced early... 支援の過程で、適切な機器を早い段階で導入することが必要

ギーに座っているときは、手は伸びる範囲にしか届きません。視線は、前方や側方を見ることはできますが、真後ろを振りかえることは困難です。自分で移動することが困難な状態が長く続くと自立心を失い、他人に頼ることが当たり前になり、受動的・消極的になるといわれています。パーソナリティーが急速に形成される低年齢の段階から、自立した移動手段を手に入れることは、その子の心身の成長に良い影響があると考えられます。

移動手段を手に入れることで、子供の生活範囲は大きく広がります。生活範囲が広がると、興味を引く物事が増加します。「あれはいったい何なのか」「あそこに行けば面白いものがある」「ここからあの場所には、どうやって行こうか」様々なことを頭の中で考えながら子供は知的に発達していきます。手動の車いすを使用するのが困難であれば、電動車いすの使用も考慮すべきです。現にヨーロッパやアメリカでは1歳児から電動の移動機器や、電動車いすを使用させる試みが積極的に行なわれています。

多くの保護者は自分の子供に、特に歩行することが少しでもできる子供の場合は、小さい頃から車いすを使わせることを嫌がるのではないのでしょうか？それは、車いすを使うことを、子供の運動機能の発達の「終わり」の象徴のようにとらえてしまうからです。車いすを導入することで、「歩くことをやめてしまうのではないかと」危惧するからです。そういったとらえ方や危惧とは逆に、私たちは、「車いすを使って楽な移動を獲得することが、歩行訓練に対する『やる気』を増加させるのではないかと？」と考えています。

私たちは車を運転して出かけたり、自転車を使用して移動しますが、まったく歩かなくなることがあるのでしょうか？たとえ歩

行ができる子供でも、移動をするのに非常に時間がかかってしまう場合や疲労を伴う場合、車いすを使用してすばやく移動をしたり、楽に移動したりすることは、その子の生活範囲を大きく広げることに結びつきます。生活範囲が広がると、歩行しなければ行くことができない場所や、歩行したほうが便利な場所も増加します。それが歩行訓練への「やる気」の増加につながるのではないかと考えています。

例えば、家から公園までは車いすを使って移動して、公園では歩いて遊ぶ、公園から家へは車いすで帰る、といった使い方はどうでしょうか？すべてを歩行で移動しようとする、もしかしたら公園に着いた時点で疲れきっているかもしれません。公園までの距離が遠くて、手動の車いすでは疲れてしまうのであれば電動車いすではどうでしょうか。

子供にとって「歩行」は目的ではありません。「移動」が目的であり「歩行」はその手段の一つです。ですが、多くの大人は「歩行」を目的や目標としてしまいがちです。視点を変えて、「移動するための手段」として歩行・車いす・電動車いすを同等の物として考えるべきではないでしょうか。

マイラ社の車いすブリックス、メックスはそんな小さな子供や力の少ない子供の移動（＝心身の発達）を助ける車いすです。

ブリックスはこぎやすいよう、折りたたみ機構を排除し固定フレームにすることで、軽量化とフレーム剛性を高め、小さな子供でも軽い力でこげるように設計されています。また、パーツの交換で成長に合わせてサイズ変更することもできます。メックスは折りたたみ機構を持ちつつも、高いフレーム剛性を実現した設計がなされ、その結果、非常に高い操作性を持っています。オプションも豊富で様々な子供に対応します。

ブリックス

子供と親の視点から作られた、軽量（約9kg）で取り回しに優れた車いすです。

座幅18cm、非常に小さいサイズから用意されています。自分で車いすをこいで移動するという体験、そうした体験を少しでも早い時期から始められるように様々な工夫が盛り込まれています。小さな力でもこぎやすいように固定式フレームを採用し、旋回性能を上げるために大き目のキャンバー角度が付いています。



メックス

駆動フレームとシートフレームが独立した構造になっており、駆動パーツの微調整無しで、シート部の角度調整ができます。カラフルなデザイン、フレームワークに加え多彩な調整が可能です。折りたたみ構造を持ちながらも高い剛性を持ち、こぎやすさを重視しています。

